竹富島の種子取祭（上）

――その古層と新層――

畠山　篤

はじめに

播種儀礼　主食となる穀物の確保は生存に関わる基本的な問題であるだけに、人力を越えた神の力に与ろうとする。新嘗祭では穀物を確保した喜びを神に申しあげて感謝している。また、農耕を始めるにあたって祈年祭を行って豊作を祈願している。穀物の種子を播く時に催す種子取祭もその一類で、神授の種子が播かれた後、神の加護によって立派に生育し、豊作になることを祈っている。この種子取祭は南島一円に分布するいわゆる播種儀礼で、特に八重山地方の竹富島（タケトミジマ）の種子取祭（サイ）は今にも脈々と伝えられている。

祭りは十日間におよんでおり、その儀礼の次第はよく整っている。また、この祭りには興味深い由来譚が伝わっている。そして、神司（カンツカサ）（神女）によって「願い口（ニガフチ）」（祝詞）が唱えられ、村人によって神歌が歌われ、神事芸能を中心とした民俗芸能が二日間にわたって奉納されている。八重山地方の種子取祭は大体静かで、「稲が種子（イニダニ）アヨー」を斉唱するていどであるが、この島だけは華美な歌舞をともなっている。この二日間はまさに歌と踊りの島になる。

本論のねらい　本論は、この祭りにおける由来譚や儀礼、そしてその儀礼の場で唱えられたり歌われたりする「願い口（ニガフチ）」や神歌、さらには奉納される神事芸能の関連を考えてみたい。これらのあり方から、祭りがどのように変容し、そこで歌われる歌謡や神事芸能がいかに生成し継承されてきたか、そしてこれらと連動して由来譚がいかに生成し機能してきたかを、少しでも明らかにしてみたい。

研究の歩み　華やかな祭りであるだけに研究も少なくない。その主なものを列挙してみる。

○喜舎場永珣「竹富島の種子取について」（喜舎場永珣『八重山民俗誌上巻』（一九七七年）所収）。　○喜舎場永珣『八重山古謡』（一九七〇年）。　○上勢頭亨『竹富島誌』（一九七六年）。　○狩俣恵一「竹富島の種子取祭と芸能」（『沖縄文化研究5』法政大学沖縄文化研究所（一九七八年）。　○波照間永吉・大城学「竹富島のタニドゥルの神歌」（『沖縄の神歌―沖縄の神歌伝承活動（Ⅱ）＝八重山諸島＝』所収、沖縄県教育委員会（一九八八年）。　○全国竹富島文化協会編『芸能の原風景』（一九九八年）。

特に最近刊行された『芸能の原風景』は、この種子取祭の台本集として解説や語釈、共通語訳が優れている。また、狩俣恵一氏の概説も要を得ており、刺激的である。

私がこの種子取祭を調査したのは、平成二年のことである。この時の調査をもとにし、数々の研究から教えをうけて私の理解を述べていきたい。

一　由来譚

六山　竹富島にはかつて六つの村があり、それぞれに御嶽があり、酋長がいた。『琉球国由来記』（一七一三年）の巻二十一によると、次のように記している。

波座間御嶽　竹富村
神名、豐見ヲレ山
御イベ名、ハタト大アルジ
（屋久島ヨリ御渡。根原カミトノ、ヲガミ初ル）
仲筋御嶽　同　村
神名、宮鳥ヤ神山
御イベ名、イヘスシヤ
（ヲキナワガナシヨリ御渡。アラシハナカサナリ、オガミ初ル）
幸本御嶽　同　村
神名、國ノ根ノ神山
御イベ名、モチヤイ大アルジ
（久米島ヨリ御渡。幸本フシカワラ、オガミ初ル）
久間原御嶽　同　村
神名、東久間眞神山
御イベ名、友利大アルジ
（ヲキナワガナシヨリ御渡。久間原ハツ、オガミ初ル）
花城御嶽　同　村
神名、豐見ハナサウ
御イベ名、イヘスシヤカワスシヤ
（ヲキナワガナシヨリ御渡。タカネトノ、オガミ初ル）
波レ若御嶽　同　村
神名、新カシノ神山
御イベ名、袖タレ大アルジ
（徳島ヨリ御渡。鹽川トノ、オガミ初ル）

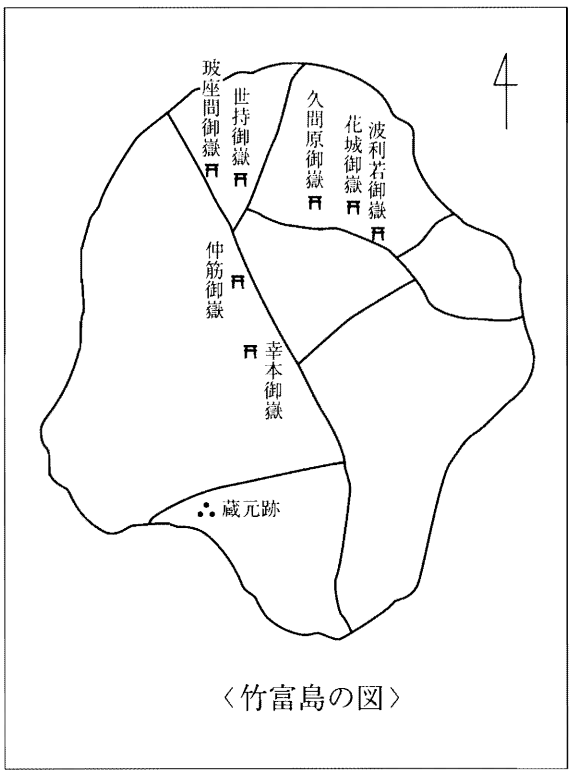
右六御嶽、立始ル由来ハ、昔、竹富島ニ、波座眞村根原カミトノ、中筋村アラシハナカサナリ、幸本村幸本フシカワラ、久間原村久間原ハツ、花城村タカネトノ、波レ若村鹽川トノトテ、時ニ村ノ酋長トシテ、六人心ヲ合セ、諸人ヲ愛シ居ケルガ、島ノタメ、作物ノタメ、守神拜ミタク、願居ケルニ、如レ願御神、國國島島ヨリ、御渡ノ託宣ニ、汝等念願、通達シテ、爲レ島、爲二諸人一、守神トシテ、彼島ヨリ渡タル由也。

六人酋長始メ、村中ノ者共、謹而拜シ、則彼山山ヲ相拵、一御前ヅ、勸請、拜ミ初メタルト也。

根原カミトノをはじめとする六人の酋長は結束してシマ人（村落共同体の構成員）を愛し、島の繁栄や作物の豊作のために守護神を求めていたところ、諸神が屋久島、沖縄本島、久米島、徳之島から渡来したい旨の託宣が下った。そこで六人の酋長がそれぞれに勧請して祭ったというのである。ほぼ同趣旨のことは、『琉球国旧記』（一七三一年）巻之九にも記されている。この六つの御嶽を「六山（ムーヤマ）」と称し、今日に至っている。この六山にはそれぞれ神司（カンツカサ）（神女）がおり、年中行事を司っている。

この他、旧オーセー（村番所・役場）の跡を世持御嶽（ヨモチオタケ）として祭った御嶽があるが、現在の種子取祭の神事はここで執り行っている。

根原金殿の統一　六山の創建は作物・主食の確保にも由来しているが、種子取祭の由来もまた五穀の豊穣をめぐるものであった。大正十年の



〈竹富島の図〉

竹富島の語りを喜舎場永珣氏が聞き書きしている。[1] 一級資料と思われるので、そのまま引用することにする。

往昔、この島には六名の酋長がいたが、ことに仲筋と玻座間の両酋長は長い間穀物の豊穣をめぐって対立していた。ところがこの両者の農作物の争いは遂に玻座間村の酋長の根原殿の勝つところとなり、以後玻座間側は粟作、また仲筋村側は麦作という具合にそれぞれの作物を司ることとなった。またその事があってのちにはこれ迄の両者の対立は解消され、農作物の諸行事はもとより種子取の日取りに至るまですべて両者は合同して取り行われるようになった。即ち「ツチノエネ」の日をもって種子蒔き始めの式が行われるようになったのであった。

ところが一方、小波本村においては、同村の酋長の幸本フチンガラ（節瓦）の定むるところの「ツチノエウシ」（ママ）の日にそれを取り行ない、また東方諸村のハナスク・ハーチャーやバリバガ・ハンジュンガニや久間原ハチンガニなどは「キノエ午」の日のそれを取り行なうという具合にその日取りはまちまちであった。

しかるにその頃、玻座間村の根原神殿は最も勢力が強く、また徳望も高かったためにその徳を慕いくるものが多かったという。また根原神殿の妹は幸本節瓦の許に嫁いでいたが、幸本は自分の信ずる「ツチノトウシ」の日にこの種子蒔きの行事を行なっていた。ところが農作物の豊穣は根原神殿の比ではなく、根原にはどうしても勝てなかった。そこで幸本節瓦の妻は兄の根原神殿の取り行なう「ツチノエネ」の日に種子取を行なうよう幾度となく夫に勧告をしたが、夫はそれを認めなかった。

そこで幸本の妻は遂に「兄の根原の粟と貴方の粟とは例え同じ量であっても、それで神酒や飯初（イバチ）をつくれば、兄の方がその出来量（カサ）ははるかに多い」ことを進言したので、夫の幸本もついにそれを認め、それ以後は「ツチノエネ」の日にそれを取り行なうのが良策であることに承諾したといわれる。

しかるに幸本御嶽の氏子等はその後もなお従来の習俗をそのまま踏襲し、「ツチノト丑」の日に行事を取り行なっていたが、遂に明治の末年頃からは「ツチノトネ」（ママ）の日にそれを行なうようになり、計二回の種子蒔き行事を取り行なうようになったといわれている。

一方また東方の部落においても、この根原神殿の豊穣があまりにも見事であったため、久間原ハチンガニやハナスク・ハーチャーやバリバガ・バンジュンガニ等の三人の酋長はともに相謀って、根原神殿や幸本節瓦等の種子取行事の日にはそれを見習うためわざわざ覆面踊子（アンガマ）の姿に扮して遥々（アガトカラ）訪れて来たという。然してこの三人のアンガマの語るところと根原神殿の応答の言葉はいまなお「種子取世乞いの巻踊アヨウ」として唄いつがれ

ている。このようにして島全体が統一的な種子取行事をここに取り行なうようになったのであった。

伝承協力者　東金城亀（六十六歳）、同義一（亀氏の弟）、細原加那（六十一歳）、上瀬戸保久利、仲野松翁等。

（大正十年十一月）

地名と酋長の名に伝承の乱れや表記の不統一があってやや分かりにくいので、一応次のように統一して表記することにする。

○玻座間村の根原金殿　○仲筋村の新志花重成　○幸本村の幸本節瓦　○久間原村の久間原発金　○花城村の他金殿　○波利若村の塩川殿

また、右の伝承には誤植と思われる箇所があるので、（ママ）を付した。（ママ）を付したツチノエウシはツチノトウシ、ツチノトネはツチノエネでないと意味が通じない。

右の種子取祭の由来譚は、次のようにまとめることができる。玻座間村の根原金殿と仲筋村の新志花重成が穀物の出来不出来を争い、根原金殿が勝利し、彼の祭日・戊子に統一した。次いで玻座間村の根原金殿と幸本村の幸本節瓦の作物争いになったが、これにも根原金殿が勝って祭日を戊子に統一した。残りの東方の三つの村の酋長たちは、根原金殿の豊穣にひかれて彼の催す種子取祭にアンガマ（覆面踊子）に身をかえて来訪し、遂に彼の祭日・戊子に合わせて祭りをすることにした。この時の根原金殿と三人の酋長たちとの応答が、世乞いの巻き歌である。こうして、竹富島の種子取祭は戊子に統一された。

ただし、幸本御嶽の氏子だけは己丑を墨守していたが、明治の末年に戊子にも祭りをしたという。すなわち、幸本節瓦の直系（元屋）を除いた幸本御嶽の氏子だけは、従来の祭日の他に他村の統一した祭日にも種子取祭をしたというのである（戊子の翌日が己丑なので二日連続の祭りであった）。

こうしてみると、今日のように島あげて同じ日（戊子）にだけ種子取祭をするようになったのは、明治末年よりさらに時代が下るということになる。

装いとしての語り　この由来譚は正確には種子取祭そのものの由来を語るものではなく、種子取祭の日取りが統一された経緯を語るものである。この祭日を統一していった六山の創立者（六人の酋長）の事跡は、現在の祭りの原形を示している。種子取祭の五日目の戊子に穀物（粟など）の種子播きが行われ、祭りは六山の六人の神司によって司祭され、世乞いの巻き歌では根原金殿と三人の酋長たちとの応答が再現されている。由来の語りとは「現在」の説明であって、現に存在するものの意義を十全のパワーをもつ始原に立ち返って説明するものである。島の発展を願って六山を創建した酋長たちの行為は神聖であり、その酋長のなかの酋長ともいうべき根原金殿の存在は絶対的ですらあった。この祭日の統一を語る由来譚は、喜舎場永珣氏が説くように、「その背景には五穀の豊穣をもたらし得る酋長によって農耕儀礼の統一及び島村の統合が成就せられた事情を物語る」[2]ものでもあった。このように根原金殿が祭日を統一したという語りは、現在の祭りのあり方に権威を与え、シマ（村落共同体）の秩序を説明するものであった。

しかし、語りによくよく耳を傾けてみると、六山の創立者たちの行為は決して絶対的ではなく、幸本御嶽の氏子だけは明治末年まで従来の祭日で祭りをしており、戊子に祭日を統一してからもこの従来の祭日にも祭りをしていたという。六山が全く同一の祭日（戊子）にだけ種子取祭を催したのは、かなり後のことなのである。始原を説明することで現在に権威を与えるという語りの論理は、「最近」（この由来譚を語った時点における）の事情説明によってかなり破られているのだ。語りが装いであり、必ずしも歴史的事実でないことは、この一点からしてもわかる。右の語りはほころびをみせ、不完全なのである。

説話上は自分たちの御嶽の創立者に逆らい、現実にはその創立者の直系の子孫（元屋の当主）に逆らう幸本御嶽の氏子集団にも、それなりの論理があったろう。恐らく自分たちの御嶽の創立者の定めた最初の祭日にこそ最も原初の力がこもるという伝承上の論理に強くこだわったと考えられる。元屋の当主の権威よりもこの伝承上の論理を優先させたのだ。このように語りと語りが対立していたと想像される。

干支の知識　右の語りが史実でないことは、干支（エト）による日取りがこの語りの中核になっていることからもわかる。

中鉢良護氏のなした琉球の暦法と暦注の研究によると、八重山における干支による日取りの採用は、十七世紀を遡ってはいない。それまでは、北風が吹きはじめて降雨の時期を経験的に察し、それぞれの村々で播種の準備をしていた。それが、十七世紀に入ってから日干支（ヒエト）をもとにした暦注の知識が導入され、過剰なまでの意味づけが広まったという。[3] 十七世紀よりも遥か昔の六山時代に干支によって祭日を選択することは、まったくありえなかったのだ。

士族の指導　狩俣恵一氏は、十七世紀以後に種子取祭を統一したのは士族（ユカルピトゥ）で、彼らの指導のもと、経済的に合理的であることを理由に、士族の信仰する火の神（ピーヌカン）を祭る聖域で種子取祭を執行したとし、およそ次のように考察している。[4]

士族は祭祀に深く関与し、王府や間切（マギリ）（地方の行政単位）が祭日の日選りをし、年中行事の指導的役割を果している。士族制度が廃止されてからもその遺制が残り、公民館の館長が祭主を務め、氏子たちは館長やその次位にあたる主事（村の責任者）の自宅を表敬訪問している。

士族は王府の意向をうけて村の火の神をオーセー（村番所・役場）に祭っていた。オーセー廃止後、村の火の神は清明御嶽（セイメイオタケ）に移され、それからオーセー跡の世持御嶽（ヨモチオタケ）に移された。現在の種子取祭は世持御嶽で行われているが、ここに火の神が移される前は清明御嶽で種子取祭をしたという。このように、村の火の神を祭る聖地で種子取祭をするという考え方は根強く、これは村の火の神を信仰する士族の強い指導によると考えられる。

それまでの種子取祭は、穂利（グイ）（豊年祭）や根付き祝（ナーツヨ）いの農耕儀礼と同じく、六つの御嶽でそれぞれに決めた祭日に行っていたであろう。

士族は、まず竹富島の最大勢力である玻座間御嶽の氏子たちの賛同を得るように配慮したようである。すなわち、玻座間御嶽の創立者である根原金殿の事跡ということにして、祭日の統一を図ったのである。世乞いの儀のはじめと終わりを根原家でするのは、この語りのねらいが儀礼化された姿であろう。

以上のように説く狩俣氏の説は正鵠を射ているであろう。

しかし、この士族のくわだてが徹底しなかったことは、幸本御嶽の氏子たちが明治末年まで自分たちの祭日にこだわったことに示されている。幸本御嶽の祭日へのこだわりは、古層の祭りへのこだわりであり、島役人（後には公民館長）に対する抵抗でもあったのだ。

話者の立場　この由来譚の語られた「現在」は、大正十年のことである。王府が瓦解して既に半世紀が経過している。変化の少ない島であるからこの語りに島役人時代の伝承が色濃く残っているとしても、それなりに時代の変容もあろうし、話者の立場も考慮しなければならないだろう。

この語りの話者は五名以上いるが、士族に連なる者なのか、酋長の血筋に直結する元屋の者なのか、またどの御嶽の氏子なのか、その内訳はまるでわからない。この由来譚は各話者の語りを聞き手（喜舎場氏）が総合的に再構成するという形をとっているため、各人の語りがどういう立場にあるかが判然としていない。

しかし、語りの内容から、最も氏子の多い玻座間村が祭りの統合の

中核となり、仲筋村がこれを支持したことがわかる。大正十年当時、この両村が種子取祭の有力な二本柱であったわけで、現在の祭りはまさにこのあり方をさらに純化した形で継承している（後述するように、今日では玻座間集落と仲筋集落からしか奉納芸能が出ていない）。話者の立場は、明らかに「現在」（大正十年当時）の祭りの執行体制の主要部を護持するところにある。

種子取祭統合の三番手は幸本村の元屋（幸本御嶽の創始者の直系）であるが、ここには元屋と氏子たちが反目してしまった現実があった。この反目が王府時代からのことか、王府瓦解以後のことか、その実態はわからないが、大正十年のころは六山時代以来のこととして語られていたのだ。前述したように、語りは「現在」の根源が「始原」にあるように装いがちなのである。

島の地図を見てもわかるように、以上の三つの村が現在の島人の居住する地域である。語りでは、残り三つの村の酋長たちがアンガマの形で一括して登場し、祭りの統合にあっさりと賛同しているが、これはこれら三つの村が遠隔地と思われていたことを示している。小さな島ではあるが、徒歩を中心とした生活圏を考えれば、竹富島規模でも広いというべきである。御嶽は本来、居住区と隣接しているものであり、さまざまな事情で居住区域を変えても先祖の聖域を崇拝することは、仲松弥秀氏が民俗地理学の立場から論じているとおりである。[5] 各御嶽とともにあった遠くの三つの村の住人が、いつ今の地区に移住したかは判然としないが、[6] 大正十年代の「現在」の歴史認識としては、一括して扱われるような存在になっていたのだ。同じ島内とはいえ、居住地を離れた者と先祖伝来の地にいる者との落差は著しい。このように、種子取祭を統合していった地域の強みが、語りによく反映されている。

以上が、喜舎場氏に語った話者たちの中心的な立場であったと考えられる。

粟と麦　最後に、この由来譚で見落としてはならない一点があると考える。それは玻座間村が粟作、仲筋村が麦作を司ることにしたということである。これはこの二つの作物の播種儀礼（後述するように種子取祭の五日目に行う）を両集落が分担したということではなかろうか。喜舎場氏が述べているように、実際の播種は播種儀礼を終えた後の適当な時期に行っている。[7] 由来譚では祭日の統一が穀物の生産を最良にすると説くが、その実態はこのように播種の時期にずれが生じている。五日目の播種儀礼を両村で分担するというのは、祭祀上の特権・優先権を示し、この両村が種子取祭の指導的立場に立つことを示していよう。

幸本村を除いて他の三つの村は早くにこの両村に吸収されており、この大きな両村の実態と、この両村が代表的な穀物の播種儀礼を分担したということとは、ほぼ対応していたであろう。それだけに、この両村に吸収されることに最後まで抵抗感をもった幸本村だけが、独自の祭日にこだわったわけであろう。大正十年時のこの語りは、村役人の関与をうけた王府時代の祭りの由来をも語っていようが、語られた当時の祭りの由来をも語っているのだ。

二　祭りの次第

次に祭りの次第を概観してみる。この祭りは旧暦九・十月の中の甲申（キノエサル）から癸巳（ミズノトミ）までの十日間である。その次第は次のとおりである。

一日目（甲申（キノエサル））　役員（公民館長や主事たち）や長老たちが集まり、祭りの開始を神に報告し、祭りの段取りを決める。また、奉納芸能の練習を開始する。芸能を演じる人々は、国吉（クニヨシ）家（玻座間村のホンジャー宅）、生盛（セイモリ）家（仲筋村のホンジャー宅）に集まり、配役を決める。舞台でまっ先に演じられるホンジャー（大長者）という神事芸能が奉納

芸能のすべての礎になっていることが、この集合によく示されている。

二～四日目（乙酉～丁亥）　奉納芸能の練習に励む。

五日目（戊子）　種子播きの日で、種子播き願いという。由来譚で語る最も重要な播種の日取りが、この日である。戸主は畑に粟などの種子を儀礼的に播く。主婦は祭りの儀礼食である飯初（粟と糯米と小豆をまぜた餅。イバチとも）を作る。オカヅとしてニンニクとスル（小魚）をまぜたものも作る。六山の神司による願いが世持御嶽で始まる。主事宅では姉妹神・叔母神といって姉妹や叔母を招いて飯初戴みの儀式をする。これは家単位では姉妹神・叔母神が豊作祈願をしていたことに基づいている。飯初戴みはかつて一般家庭でも行っていた。このような姉妹神・叔母神の働きは、神事芸能の詞章にもしばしば登場している。この日に芸能を奉納する舞台を設営している。

六日目（己丑）　ンガソージ（精進の日）で、島人は身を慎しむ。ンガは至極の意である。そこで、大声も立てないようにしている。味噌醤油や青野菜を食べないし、色茶も飲まない。かつては飯初戴みをこの日にしていた。幸本御嶽の氏子がこだわった祭日が、この日である。

七日目（庚寅）　割蒜（種子の発芽）の願いの日である。最も華やかなのがこの七日目と翌日の八日目の二日間で、祈願と神歌、神事芸能、余興芸が次々と演じられる。七日目は玻座間村が芸能を奉納する。

早朝、世持御嶽で六山の神司が村の火の神に祈願する。これと平行して、世持御嶽の弥勒奉安殿に役員や長老たちが参集し、「弥勒起こし」を行う。この奉安殿には弥勒の面を納めてある。この弥勒神は後に舞台に登場し、島人に弥勒世を見せてくれる。

この後、役員と長老たちが神司を交えて世持御嶽の前に設けられた舞台に座り、「干鯛の儀式」を行う。これは極めて丁重な勧酒の儀で、祭主（現在は公民館長）が各村の代表（現在は主事）や長老たちと干鯛（塩漬けにした後に乾かした青ボーダーの皮）を肴に酒を酌み交わしている。元来は士族を歓待する儀式であった。

引き続き「イバン（イバン戴み）の儀式」に入る。世持御嶽に生えているイバン（九年母の葉・野生の蜜柑の葉）を摘み取り、神前に供えた後に神司から一同に配られる。この生命力あふれる呪草は一同の鉢巻きの中に籠められ、これをもらった者は世乞いの儀が終わる翌朝まで締め続ける責務を負っている。

この後、神司を先頭にして一行は主事の家を訪問する。これを「参詣」ともいっている。これは元来は士族宅を表敬訪問して世乞いの儀をした名残りである。この日の夕方から行う夜の世乞いに対して「朝の世乞い」ともいう。

一同が主事宅から十時頃に祭場に戻り、世乞いの巻き歌（後述）を一しきり歌い終わると、奉納芸能が始まる。まず「庭の芸能」で、力強い集団的な芸能が披露される。

次いで、舞台芸能が演じられる。「玻座間大長者」、「弥勒」、そして例狂言の「鍛冶工狂言」、「組頭（薄崩し狂言）」、「世持（種子蒔狂言）」、「世曳き」が演じられる。以上は必ず演じなければならない神事芸能である。この他、島の伝説や歴史を背景にした芸能や、さまざまな踊りや狂言、組踊りなどが、休みなしに夕方までエネルギッシュに演じられる。

夕方から「夜の世乞い」に入る。役員や長老たちはイバンを籠めた鉢巻きをして群行し、夜通し各戸を回って豊作を予祝する神歌を歌う。まず、一行は祭日を統一したという根原金殿を始祖とする根原家（元屋）を訪れて世乞いの儀をする。それから各集落ごとに分かれる。六つの村も今日では、玻座間東集落と玻座間西集落そして仲筋集落の三つに統合されている。翌朝、夜の白々と明ける頃にまた根原家に戻って歌い納める。夜を徹して歌いあげた世乞いの神歌も、最後はしっとりとしている。

八日目（辛卯）　萠萠（発育）の願いの日である。一行は根原家から祭場に戻り、イバンを祭場の採取地に納める。

それから昨日と同様に「干鯛の儀式」に入る。この時、仲筋村の例狂言の「御主前（シドゥリャニ）」を奉納する。

次いで、一行は別の集落の主事の家を訪れ、「朝の世乞い」をする。十時頃から昨日と同じ要領で、仲筋村が芸能を奉納する。まず、「庭の芸能」を力強く演じる。

次いで、舞台では「仲筋大長者」・「弥勒」そして例狂言の「御主前（シドゥリャニ）」、「天人」、「種子蒔狂言」が演じられる。以上も必ず演じなければならない神事芸能である。この他、昨日と同じく島の伝説や歴史を背景にした芸能や、たくさんの余興的な芸能が、夕方まで奉納される。

九日目（壬辰）　祭りの諸支払いをし、弥勒奉安殿で弥勒神への感謝をする。

十日目（癸巳）　種子取物忌の日である。農作物に害虫がつかないように祈願する。かつては「浜下り」があり、浜で神司の祈願があり、相撲大会もあったという。

儀礼・神歌・神事芸能　以上、十日間にわたる次第をみてきたが、七日目、八日目の二日間が中心であることがわかる。この二日間の祭りが、(1)儀式、(2)世乞い、そして(3)芸能の三部構成から成り立っている、と指摘する狩俣氏の説は炯眼である。そして、氏はこれら三つの構成には芸能の発生を考える上で示唆を与えるとし、一貫した信仰、考え方に基づいていると論じている。[8]

私も基本的にこの見方に同意するものである。儀礼、また世乞いで歌われる神歌、そして奉納される芸能のうちの神事芸能、この三つが以下注目すべき要素であると考える。

三　儀礼の願い口

二つの儀礼　この祭りの儀礼は、狩俣氏が前掲論で分類するように二分できる。一つは役員（かつての士族・島役人）や長老たちが中心となる儀礼（干鯛の儀式や弥勒起こしの儀式など）であり、二つは神司を中心とした儀礼（イバンの儀式や礼拝、世乞いなど）である。前者は士族・島役人を中心とした俗的な男の世界で、「祭」を補佐する「政」の側に立つため、神にかかわることばがない。これに対して、後者は祭りを直接担当する神女の「祭」の側にあるので、神々にかかわることば、祈願のことばがある。祭りの核心部はこの後者にある。

願い口　神司の唱える神への祈願のことばを「願い口」という。種子取祭に唱える願い口の典型例を次に上げてみる。

種子取ぬ願い

根原金殿ぬ　　根原神殿が
仕立てい始みおーたる　　為始めなさった
ちちぬ子ぬ　　つちのえ子の
種取ぬ　願い　　種取りの　願い
種下しぬ　願い　　種下ろしの　願い
大畠　摭畠ぬ　　大畠　摭畠の
物作ぬ　願い　　物作りの　願い
作どうー　作ぴーぬ　　作る場所の　作る日の
願い　後てぃ打ち　　願い　後へ打ち
前てぃ蒔く　　前へと蒔く
蒔く種や　　蒔く種は
五日越　　五日越し
十日越ぬ　　十日越しの
夜雨んな　犬が毛　　夜雨には　犬の毛

猫が毛に
根降い
元降いし　給うり
根降い
元降いぬ　上や
力草だぎ
薄だき
栄し給うり
芽美さ
耳美さ
有らし給うり
初夏　若夏な
大穂　長穂　出じ
石ぬ稔
金ぬ稔
真粒玉
給うらりてぃり
のうる天気
かい天気　給うらり
んじ　六月ぬ
真期や　上粒取り
真粒取り　神ぬ
御花米　御初
上ぎしみてぃりぬ
願いどう
願いうんぬくば
取り受き給うり

猫の毛のように
根を降ろし
元を降ろして下さい
根が降り
元が降りての　上は
力芝草のように
薄のように
栄えさせて下さい
芽が美しく
新芽が美しく
あらせて下さい
初夏　若夏には
大穂　長穂が　出て
石の稔りのように
金の実のように
真粒玉を
恵まれて
よい天候
よい天気を　恵まれ
来る　六月の
真期には上粒を取り
真粒を取り　神の
御花米　御初穂を
あげさせて下さいと
願いを
祈願しますから
受け取って下さい

なみ給うり
うーとーとう

聞きとどけて下さい
あー尊[9]

これを要約すれば次のようになろう。まず、根原金殿の始めた戊子（ツチノエネ）の祭りの願いを今日する、と祭日を讃美する。次いで、種子を播くや雨に恵まれ、下の根は立派に下ろし、上にも立派に発芽して成育する。そして、初夏になると見事な穂をつけ、刈り入れでは天気に恵まれ、上等の初穂を神前に供えたい。以上のような願いを聞きとどけてください。

祭日を統一したという出だしには、歴史的には俗的な権力をもつ士族が大きく関与しているとしても、伝承上は御嶽の創立者が統一した由緒ある祭日であると讃美しているのは、祭日をまず祝福する南島一円の類型に合致している。次に、理想的な穀物の一生を叙述し、初穂を神に献上したいと願うのも、南島では普通に見られるあり方である。穀物の種子は神から授けられ、これをシマ人が守り育て、その収穫物を神に感謝して捧げるというのは、きわめて理に叶ったことである。

なお、願い口のなかに「力草だぎ」（力芝草のように）とあるのは、イバンの儀式に登場するイバンのことである。現行ではイバンは九年母になっているが、元は力芝草だったらしい。鉢巻きに入れて戴くイバンは、薄とともに穀物が順調に力強く生育することを象徴する呪物であることが、ここによく示されている。

秘儀から公開へ　このように、この願い口は南島の豊穣儀礼によくみられる型を踏んでいるが、種子取祭の主題はまさにこの願い口に集約されている。この願い口は神司が神前において小声で唱えるもので、秘儀にされている。

ところが、この神秘的な詞章は祭りが進むにつれて公開され、以下の神歌も神事芸能もかなり「願い口」の主題と表現の変奏になっている。また、この他の奉納芸能の詞章も、この願い口の詞章に通じてい

る（後述）。秘伝は次第に公開され、その効果が繰り返し繰り返し発揮されるように仕組まれているようである。

四　世乞いの歌謡

二つの世乞い　「世乞い」とは世果報（この祭りでは穀物の豊穣）を乞い求めることで、既に祭場に招来している神々から授けられた果報を、すべてのシマ人にもたらそうとする呪儀である。この世乞いには朝と夜の世乞いがある。一つは奉納芸能を演じる二日間の朝、主事宅を訪ねるものであり、もう一つは一日目の奉納芸が終了してから夜を徹して各戸を訪ねるものである。両者とも形式は全く同じであるが、前者は竹富島を統括した士族を表敬訪問した名残りであって、世乞いの本義は後者にある。

ただし、夜の世乞いのはじめと終わりだけは、祭日を統一したといわれる根原金殿の直系の子孫である根原家を島あげて訪問している。この根原家訪問も、その背景をみてみると、士族が主導して種子取祭を統一した経緯を反映している。玻座間村だけで世乞いをした時代は、玻座間御嶽の創立者の直系である根原家から訪問していただろうが、こういう古層の世乞いを島全体の世乞いに再編成・格上げしていくきっかけは、島役人が作ったのである（前述）。このように根原家を島全体で訪問するということ以外は、夜の世乞いは古来の姿を残していると考えられる。

歌謡の分類　『芸能の原風景』は世乞いの歌謡を次のように三つに分類している。

○道歌
○庭歌（巻き歌、シキドーヨー）
○座敷歌（稲が種子アヨー、根下りユンタ）

これは歌われる場による分類であるが、同時に歌われる順にもなっている。

道歌　イバンを鉢巻きにこめたシマ人は、神司そして役員を先頭にして、ドラ、太鼓をならしながら祭場を出発し、道々歌うのが「道歌（道アユーとも）」という。以下の歌謡の歌詞は、『種子取世乞い唄』（竹富島公民館世乞い唄を守る会編、平成二年十月二十九日刊）による。共通語訳はシマ人に聞き、また研究の歩みにあげた諸論を参照して私が試みてみた。

1（ハイエ）戊ぬ子ぬ　種子取　戊子の日の　種子取（高々と上
（アガル　ピャーシュ　ムチ　がる　囃子よ　世を持ってくる
キャル　ピャーシ）戊ぬ子ぬ　囃子よ）　戊子の日の　種子取
日　種子取

※（　）は囃子詞、以下省略する。主題部も囃子詞（アガル〜ピャーシ）をはさんで反復しているので、以下省略する。

2神司　お供し　神司が　お伴して
3親加那志　お供し　役人様が　お伴して
4弥勒世ば　賜らる　弥勒世を　賜わる
5神ぬ世ば　賜らる　神の世を　賜わる
6麦ぬ世ば　賜らる　麦の豊作をば　賜わる
7粟ぬ世ば　賜らる　粟の豊作をば　賜わる
8米ぬ世ば　賜らる　米の豊作をば　賜わる

戊子のよき日に種子播きをし、神司そして役人が神に奉仕し、麦・粟・米などの豊作がもたらされ、理想的な弥勒世・神の世が下される、と歌う。囃子詞は、高々と囃すほど世果報（豊作）がもたらされる、とその効用を説き、歌謡・神歌を高らかに歌うことを勧めている。

なお、米作も祈っているのは、稲作のできない珊瑚礁の島では一見不審であるが、かつて西表島で稲の出作りをしていた名残りである。

巻き歌　訪問先の家の庭に入ると、時計の針と逆の方向に廻りながら

巻き踊りをし、次のような「巻き歌（巻き踊りのアユーとも）」を歌う。歌は奇数番号と偶数番号のメロディーが異なり、懸け合い形式で歌うのが本来である。なお、6・8・9の「あんがま」には二解あり、別解を共通語訳の（ ）につけた。また、歌詞の順序には玻座間と仲筋に少々違いがあるが、ここでは仲筋の順序によった。

1あが遠から　来がな　誰が故　遠くから　やって来ました。誰
どう　来侍る　此ぬ殿内　主　が故に　来たかというと、この
前ぬ　故どう　来侍る　ヨン　殿内の　ご主人の　故に　来ま
ナ　此ぬ殿内　主前ぬ　した。ヨンナ　この殿内の　ご
主人の。

2現わりり　来がな　走し来り　現われよ。こちらへ来なさい。
り（ぱちくりり）　んぞよ　此　走って来なさい（覆面を取りな
ま愛しゃ　あていどう　此ま　さい）。愛する者よ。ここが愛し
に　来侍る　ヨンナ　此ま愛　く　あるから、ここに　いらし
しゃ　あていどう　た。ヨンナ　ここが愛しく　あ
るから。

3うやゆみさ　あていん　御恥　畏れ多く　あるけれど、お恥ず
じかさ　あていん　遊び好き　かしく　あるけれど、遊び好き
やりどう　御許し　賜り　ヨ　なので、お許し　ください。ヨ
ンナ　遊び好き　やりどう　ンナ　遊び好き　なので。

4遊ばば　遊び　踊らばん　踊　遊ぶならば　遊べ。踊るならば
り　足元ゆ　みしく　思い　踊れ。足元に　注意して、思い
留みり　ヨンナ　足元ゆ　み　を　とめよ（用心せよ）。ヨンナ
しく　足元に　注意して。

5此ぬ殿内　御庭や　大敷てい　この殿内の　お庭は　一番座敷
どう　踏みよる　大畳ぬ　だと思って　踏んでいる。大き
上や　広や　莚　ヨンナ　大　な畳の　上のような　広い　莚
畳ぬ　上や　と思って。ヨンナ　大きな畳の
上のような。

6此ぬ夜　あんがまぬ　踊る足　今夜の　覆面の訪問者（姉様と
見りば　みょ前　立つ馬ぬ　も）の　踊る足を　見れば、国
足　似ん如に　ヨンナ　みょ　王の御前に　立つ馬の　脚のよ
前　立つ馬ぬ　うだ（美しい）。ヨンナ　国王の
御前に　立つ馬の。

7此ぬ殿内　主前や　果報ぬ　この殿内の　ご主人は、果報の
生り　やりどう　米蔵ゆ　腰　生まれ　なので、米蔵を　腰当
当てい　思子　前なし　ヨン　てにし、かわいい子を　前にし
ナ　米蔵ゆ　腰当てい　て。ヨンナ　米蔵を　腰当てに
し。

8此ぬ夜　あんがまや　夏粟殻　今夜の　覆面の訪問者（姉様と
垂らし　我身や　豆なゆてい　も）は、夏の粟の茎を　垂らし
押し巻き　遊ば　ヨンナ　我　ているようだ。私は　豆の蔓に
身や　豆なゆてい　なって　押し巻いて　遊ぼう。
ヨンナ　私は　豆の蔓になっ
て。

9うるずみん　あらぬ　若夏ん　初夏でも　ないのに、若夏でも
あらぬ　此ぬ夜　あんがまや　ないのに、今夜の　覆面の訪問
炒る米　含み　ヨンナ　此ぬ　者（姉様とも）は、炒った米を
夜　あんがまや　口に含んだように黙っている。
ヨンナ　今夜の　覆面の訪問者
（姉様とも）は。

よくみてみると、奇数番号は来訪者のことばであり、偶数番号はこれを接待する主人のことばである。ただし、9だけは例外で、8と同じく主人のことばである。確認しなかったが、9のメロディーは偶数

番号のものと同じであろう。8で終わるところを、来訪者を歓待する気持ちが嵩じてもう一番を追加したと考えられるからである。

この巻き歌は、前述したように由来譚を背景にしていると説かれている。すなわち、久間原（クマハラ）村の酋長、花城（ハナツク）村の酋長、波利若（ハリワカ）村の酋長の三名が、坡座間（ハザマ）村の根原金殿の種子取祭の様子を探りに来、やがてその豊穣と人徳に魅かれて祭日の統一に同意したという。その時の金殿と三人の酋長の応答が、この巻き歌だというのである。確かに覆面の来訪者（アンガマ）が金殿の徳を慕って来訪し、金殿（主人）がこれを歓待している場面のように見える。

来訪者の素性　しかし、両者のやりとりは麗しい挨拶と祝福ばかりで、ここには由来譚に語られるような対立やドラマの片鱗も認められない。忍んで来た者がまっ先に自分から挨拶するというのも解しかねることである。

この巻き歌は、かつては世果報（豊作）をもたらす神として、あるいはその神の供人として、覆面した者が各戸を訪問して祝福して回った面影を残しているのではなかろうか。今日のアンガマは、盆において後生（グソー）（死後の世界）から現世に来訪する覆面の者（亡者）としてだけ残っているが、かつては神あるいは神の供としてもアンガマは存在したのではなかろうか。1で遠くからの来訪者であると自己紹介するのも、遠来神である面影を残している。ただし、主人に来訪することの許しを乞うなど、人としての来訪者の印象も強く、その立場はかなり曖昧になっている。

こうしてみると、この巻き歌は本来、由来譚と何の関係もなく、神歌を歌って世果報をもたらそうとする来訪者（客人）とこれを迎える主人との応答であるらしいとわかる。

来訪者が遠くからここの主人に会いに来たと門口で挨拶すると、主人が走ってお入りください（走し来（ハ）りり（ク））と歓待する。覆面を取りなさい（ぱちくりり）とも歌うのは、覆面の者を三人の酋長に見立て、その素性を明かす必要が、由来譚の側の論理としてあったからではなかろうか。神あるいは神のお供が覆面を取ったら神や神のお供ではなくなる。アンガマは最後まで覆面姿でいるのが本当である。この祭りの核心部を、祭日を統一した由来を説明しようとする周縁的な事情によって、覆面を取るように歌詞を変更（あるいは誤解）したのではなかろうか。「走し来（ハ）りり（ク）」を「ぱちくりり」に変える（あるいは誤解する）ことは、耳で聞くと何ほどの相違も感じさせないが、その意義はこの歌謡全体の主題を変えるほどに大きいことであった。

来訪者は遊び（神遊びとしての歌舞音曲）が好きだというと、主人は夜なので足元に気をつけて踊ってくださいと答える。

こうして互いに挨拶が終わると、来訪者は庭をほめ、主人は庭に立つ来訪者の足をほめる。

来訪者は主人の豊かな米蔵（富貴）と子孫繁栄を祝福すると、主人は来訪者をよく稔った粟に、自分を豆の蔓に譬え、巻き踊りを粟の刈り取りに見立てて答える。巻き踊りには主人をはじめ迎える側も多数加わっているのだ。そして、今日はまるで稲の収穫期に食べる炒り米を口にしたように来訪者は満足して黙っている、と主人は来訪者の喜びを高らかに歌いあげる。アンガマ（神あるいは神のお供としての覆面の来訪者）たちに収穫時に炒り米を食べてもらうというのは、まさにこの種子取祭の最大の主題であった。以上のように、巻き踊りもまた、ことばと所作によって豊作を予祝するものだったと考えられる。

「竹富島のタニドゥルの神歌」[10]によると、アンガマの解釈を「姉様」としている。その語構成は姉小（アネガマ）であろう。とすると、アンガマは来訪者のなかの乙女ということになり、8・9には恋の気分も入っていることになる。このようにアンガマを姉様と解したとすれば、必ずしも来訪者を覆面の者としなくてもよくなる。しかし、それでも来訪者に

は遠来の神あるいはそのお供としての印象が依然として残っている。

マユンガナシーとの共通点　『芸能の原風景』によると、同じ八重山の川平（カビラ）における節祭（シチ）（種子取祭と同一性格をもつ）でも、一日目の夜通しの祭りのあと、夜明けのころに行われる「世乞い」で、右の巻き歌ととてもよく似ている「節ジラバ」を歌って巻き踊りをすると指摘している。この儀礼は、各戸を訪問する遠来神のマユンガナシー（真世加那志）を送り出した後、元（ムトゥ）、伴（トゥムン）のマユンガナシー神職者（シンカ）がマユンガナシーの神衣を持参し、神司を先頭にたててマユンガナシーの大元家（ウフムトゥ）（神元屋とも。この祭りの中核となる家）を訪れ、その庭先で行うものである。その歌詞は次のとおりである。

節じらば

一　くぬ殿内（とぬち）主まいや　　この殿内の御主前〈御主人様〉は
うやき人やりよりば　　富裕の人でありますので
米倉（くみくら）ばくさで　　米倉を腰当にし
うやき前（まい）なし　ヨンナ　　富裕を前にしてヨンナ
シタリヌ　米倉バクサデシ　　シタリヌ　米倉を腰当にし
米倉バクサデ　ウヤキ前ナシ　ヨンナ　　米蔵を腰当にし　富裕を前にしてヨンナ

〈囃子、以下省略〉

二　くぬ殿内はんせまいや　　この殿内の御姥様は
果報（かふ）ぬ人やりよりば　　果報な人でありますので
くがに鍋　きて　　黄金鍋を据えて
茶らどたちゅる　ヨンナ　　伽羅をたてるヨンナ
三　だでふ茎玉水（ふきたまみぢ）　　ダデフ〈植物名〉の茎に溜まる玉水
ふきたまる玉水　　茎にたまる玉水
ふきたまる玉水　　茎に溜まる玉水で
三（みい）なでさびら　ヨンナ　　身撫でしようヨンナ
四　くぬ殿内主ぬ前や　　この殿内の御主人様は
遊（あしい）び好（しい）きやりょりば　　遊び好きでありますので
うゆるしたぼり　　お許し下さい
わ島主ぬ前　ヨンナ　　我が島の主の前〈お役人様〉ヨンナ
五　十日七日月や　　十七夜の月は
屋ぬ側照（てい）らしよる　　家の側を照らしなさる
ばー思（うむ）いみやらび　　私の愛しい乙女は
ばー肝すらす　ヨンナ　　私の心をなごませるヨンナ[11]

遠来の来訪神（マユンガナシー）は帰っているが、その関係者が神衣を持参して訪問しているので、一行には来訪神的性格が残っているとみるべきである。その一行が一・二で大元家（ウフムトゥ）の主人と主婦の豊かさを祝福しているのは、竹富島の巻き歌の7に相当している。巻き踊り（遊び）の許しを乞う四は、巻き歌の3に相当している。三はみそぎを主題にしているらしいが、これに相当する巻き歌の詞章はない。五は恋が主題であるが、これに通じているのが巻き歌の6・8・9である。

このように類歌性がかなり強い歌謡が同じ祭祀文化圏にあるので、竹富島の巻き歌が島独自の歌謡でないことがわかる。ここからも、祭日を統一したという由来譚とこの巻き歌とが軌を一にしていると説くことが、後の付会であり、祭りの周縁部における説明であるとわかるであろう。[12]

シキドーヨー　引き続いてシキドーヨーを歌いながら乱舞する。

1月（シキ）どう世（ヨ）ば　くやけす（ヨー　月々の世（豊作・幸）は、よく
イ　ショーハナ　ヨーイヨー　実っている。
ハ）　※（　）は囃子詞、以下省略。

2我島世(バシマユ)ぬ　直(ナウ)らば　　我が島が　始原に直ったらば
　　（豊作になったらば）、
3御酒(ウサキ)てぃそ　茶碗(シャワン)し　　御酒をぞ　茶碗で飲もう。
4神酒(ミシャク)てぃそ　角皿(スヌザラ)　　神酒をぞ　角皿で飲もう。
5旨々(ウマウマ)とぅ　うやいす　　旨い旨いと　飲もう。

それから「世(ユ)ば直(ナウ)れ」の掛け声をかけて主人を胴上げし、座敷にあがる。

月ごとに穀物が順調に実り、豊作のしるしである神酒をおいしく飲もう、と歌っている。「世が直る」とは、世果報が理想的な始原に立ち戻ることで、祭り自体があらゆる力のみなぎる始原にタイムスリップすることである。巻き歌で炒り米を食べることまで歌ったので、これに呼応して来年は神酒をおいしく飲もうと、さらなる豊作の喜びを歌いあげたのだ。

稲が種子アヨーと根下りユンタ　座敷に招き入れられた一行は、酒肴で歓待され、次のように「稲(イニ)が種子(ダニ)アヨー」を歌う。

〈稲(イニ)が種子(ダニ)アヨー〉

1戊(チチ)ぬ子(ニ)ぬ　（ヨーイ）吉(ヨ)かる　　戊子の（ヨーイ）吉き日の　種
日(ヒ)ぬ　種子取(タニドゥル)（イラヨーマー　　子取祭。（蒜が繁栄するように）
ヌ）本作る(ムトゥシク)　　豊作の本を作る。
　　※（　）は6までの囃子詞、以下省略。
2今日(キュ)が日(ヒ)に　黄金日(クガニヒ)に　本(ムトゥ)ば　　今日の日に　黄金日に、豊作の
し　かい作(シク)る　　本をば　美しく作る。
3大畑(ウフハタギ)　たふ畑(ハタギ)　播(マ)き入(イ)り　　大畑に　広畑に、播き入れた
長髭種子(ナガヒンダニ)　　長髭種子（黍）。
4五日越(イチカグ)し　十日越(トゥカグ)しぬ　夜雨(ユアミ)　　五日ごとの　十日ごとの　夜雨
し　丸(ムル)か種子(ダニ)　　が降り、丸い種子（麦）。

5犬(イヌ)が毛(キ)に　猫(マユ)が毛(キ)に　根付(ニギ)う　　犬の毛のように　猫の毛のよう
い　白粟種子(シルアーダニ)　　に　根が生え、白粟種子。
6まどぅ計(ハカ)り　きどぅ計(ハカ)り　し　　間隔を測り　幅を測って　除草
ゆらば　八十葉種子(ヤスバダニ)　　すると、八十葉種子（粟）。

ここから急テンポの曲調に変わり、「根下(ニーウ)りユンタ」を歌う。奇数番号と偶数番号のメロディーは異なる。

〈根下(ニーウ)りユンタ〉

7（ヒヤ）うるずんに　なりょ　　（ヒヤ）陽春に　なると、若夏
らば　若夏(バガナツ)に　なりょらば　　に　なると、
　　※（　）は最後までの囃子詞、以下省略。
8薄丈(ユシキダキ)　栄(サカ)りょうり　いばん　　薄のように　栄えてください。
丈(ダキ)　元(ムトゥ)りょうり　　力芝草のように　元分かれして
　　ください。
9栄(サカ)りょうりぬ　上(ウイ)なか　元(ムトゥ)り　　栄えた　上に、元分かれした
ようりぬ　上なか　　上に、
10大穂(ウフプ)出(イ)でぃ　しゅらば　長穂(ナガプ)　　大穂が出て　きたら、長穂が出
出(イ)でぃ　しゅらば　　て　きたら、
11石(イシ)ぬ実(ミー)る　賜(タボ)らる　金(カニ)ぬ実(ミー)る　　石のような堅い実を　賜わる。
賜(タボ)らる　　金のような堅い実を　賜わる。
12取(トゥ)る節(シチ)に　なりょらば　刈(カ)る　　収穫の時節に　なると、刈り入
節(シチ)に　なりょらば　　れの時節に　なると、
13直るおしき　賜(タボ)らる　かいお　　直る（良い）天気を　賜わる。
しき　賜(タボ)らる　　美しい天気を　賜わる。
14みどぅがしゃ　頂持(シジム)ち　びど　　女たちは　頭上で持ち、男たち
うがしゃ　肩持(カタム)ち　　は　肩で持つ。
15大倉(ウフグラ)に　積(ス)ん付(ス)き　長倉(ナガクラ)に　　大倉に　積みおき、長倉に　一
張(ハ)るみき　　杯にして、

16家ぬみ数　積ん付き　煙数
張るみき

家の数すべてに　積みおき、煙の立つ家すべてに　一杯にして、

17積ん付きぬ　余るや　張るみ
きぬ　残るや

積み上げた　余りは、一杯にした　残りは、

18垣内なみ　しらなみ　しらな
みぬ　余るや

垣内ごとの　稲の真積みの並び、真積みの並びの　余りは、

19御酒小　生らしょうり　神
酒小　造りょうり

御酒を　醸しましょう。神酒を造りましょう。

20此ぬ酒ぬ　取る口　此ぬ神酒
ぬ　湧ぎぱな

この酒の　出来始め、この神酒の　沸き端。

21誰る誰るどう　ひかいす　じ
りじりどう　御供す

誰れ誰れをば　お招きしようか。どなたにぞ　お供しようか。

22神司　御供し　伯母　姉妹
ひかいす

神司を　お招きしよう。伯母神姉妹神を　お招きしよう。

23御酒ていぞ　茶碗し　神酒て
いそ　角皿

御酒をば　茶碗で飲み、神酒をば　角皿で飲む。

24旨々とう　うやいす　芳々と
う　うやいす

旨い旨いと　召しあがる。かぐわしいかぐわしいと　召しあがる。

25此ぬ酒ぬ　旨さや　此ぬ神酒
ぬ　芳さや

この酒の　旨さよ。この神酒のかぐわしさよ。

26此ぬ果報どう　願ゆる　此ぬ
ざふどう　手摺りょうる

この果報をば　願っている。この果報をば　手摺りしている。

『種子取世乞い唄』はここで終わっているが、実際にはさらにもう一番を次のように歌っている。

27思た事　叶しょうり　願た事
しなしょうり

思ったことが　叶いますように。願ったことが　叶いますように。

以上の座敷歌は、穀物の種子がよく根づくことを願って胡座をかいて歌うのが本当だという。神歌の主題が所作によって補強されているのだ。

まず、戊子の吉日、種子取祭をして豊作の本を作る、と歌う。囃子詞は、蒜の繁殖にあやかって穀物も繁栄することを祈っている。各穀物（黍・麦・粟）の種子を播き、雨に恵まれて根が立派に生える。若夏になると立派に成育し、穂も出てきて堅い実を稔らす。収穫の時は好天に恵まれ、穀物を運搬し、蔵という蔵に積み満たし、豊作のしるしとして神酒を醸し、神女たち（神司や伯母神・姉妹神）に美味しく召しあがってもらう。以上の果報が叶うように、と祈願する。

このように、この座敷での神歌は穀物の理想的な一生を描く叙事詩で、主食を確保するための予祝歌である。世乞いの中核は、この最後の二つの神歌にある。

そして、この神歌が神司の唱える「種子取いぬ願い」と同一の発想をとり、共通する語句も多いことは、狩俣氏の指摘するとおりである。[13]

神のことばから祭る者のことばへ　さて、この二つの神歌が来訪者たちによって歌われるが、この来訪者がもし来訪神の立場に立つとすると、この神歌が祈願する者、祭る者の立場に立つことと矛盾している。現行の来訪者自体すでに神遊びを主人に乞うほどに人に近い存在になっており、これに対応してこの神歌も後半にいくほど祭る側の立場を鮮明にしている。この二つの神歌は神司の唱える祈願のことば「種子取いぬ願い」の神歌化した姿で、政の関与をうけない古層に属しているが、この神歌にはもう一段下にさらに古層があり、種子ものを授けてその後の穀物の理想的な一生を歌って豊作を予祝して回った来訪神

の存在があったのではなかろうか。祭られる者が種子ものを授け、穀物の栽培法を伝授し、豊作に導くというのは、現在では神事芸能の一部にしかみられないが（後述）、川平のマユンガナシーのように各戸を訪問して豊作を授けた遠来の来訪神の面影を来訪者たちに認めるべきであろう。祭られる者の神言が祭る者のことばに変化したのが、この二つの神歌だろうと推測できるわけで、神司の祈願のことばの神歌化とだけ考えなくてもいいかもしれない。

（注）

（1）・（2）・（7）　喜舎場永珣「竹富島の種子取について」（『八重山民俗誌上巻』所収）。

（3）　中鉢良護「王府の暦をめぐる諸問題」（『沖縄研究』第二八巻一号所収）。

（4）・（8）・（13）　狩俣恵一「竹富島の種子取祭」（『芸能の原風景』所収）。

（5）　仲松弥秀『神と村』・『古層の村―沖縄民俗文化論―』。

（6）　小野正敏「村が語る八重山の中世」（『大航海』14号所収）によると、中世考古学の立場から竹富島の六山時代を次のように考察している。

花城村、久間原村は各御嶽に隣接した地にあって崇拝の対象にされ、その立地条件は崖上の石垣に囲われていた。そして、これらは十四・五世紀における八重山の開発領主（例えば六山の創立者）の屋敷構造をもっているという。このうち花城村は十五世紀後葉に終わっており、竹富島にかぎらず多くの崖上の石垣に囲われた村も、同じように十五世紀後半から十六世紀初めに使われなくなったという。そして、これらの村は近世の村として他に移動してから現集落に住みついたか、直接現集落につながったかしたであろうという。

こうしてみると、六山時代は十四世紀から十五世紀後半あるいは十六世紀初めまでであり、東の三つの村はこの頃の村であったとわかる。

（9）　上勢頭亨『竹富島誌』。

（10）　波照間永吉・大城学「竹富島のタニドゥルの神歌」（『沖縄の神歌―沖縄の神歌伝承活動（Ⅱ）＝八重山諸島＝』所収、沖縄県教育委員会）。

（11）　『川平村の歴史』川平公民館刊。共通語訳は『南島歌謡大成―八重山篇―』によった。

（12）　播種儀礼は南島一円に分布しているが、この播種儀礼で遠来神が各戸を訪問して祝福を与えたと想定できる事例が、沖縄本島の北部地方・山原（ヤンバル）にあった。『南島の村落』（日本文化資料集成第九巻）第二章「山原―その村と家と人と」（宮城真治著）の第二部山原の家第七章農耕の「二、たねとり（タン・トイウ）播種」の項に、次のように記している。

種播きの晩は、十四、五歳以下の少年少女は数名宛一団となって家々を巡り、円陣をなして行進し、拍子に合せてたんとういの歌を謡って飯を貰っていた。青年達は簑笠を着けあるいは思い思いの変装をなし、他郷の言葉を遣い旅人に擬して新穀の祝言を述べ、飯を貰って歩いた。老人等は嘉例として杯を差したりした。娘や嫁達はこれを看破しようとして色々問答などをした。看破されると貰わずに逃げて行くのもあった。看破されなければ飯を貰って得意になって出て行った。

これらはもと祭祀の上に重要なる役割をなすもので、神として祝福するものであった。されど人々が神としての恐怖と信頼の念が薄らいで、神であることを止めて一種の遊戯に堕して畢（しま）ったのである。近年は風教上善くないといって大方これを禁止した。残して置いても悪くはなかったと惜しい気もする。

所によってはのろ・根神等を家に招いて祝福して戴くこともあった。彼等はあまうゑだと称する稲作のくわいにや等を謡って祝った。

簑笠をつけたり変装したりした青年は遠来神の面影をよく残し、稲の理想的な生産過程を主題とする「天親田（アマウエーダ）」の神歌を歌って各戸をめぐり、歓待されている。竹富島の来訪者も遠来の客とされ、アンガマ（覆面の者）とも言われて歓待されている。そして、主人を祝福し、「稲が種子アヨー」と「根下りユンタ」という神歌で穀物の理想的な生産過程を歌いあげている。山原ではノロなどの公的な神人も来訪して祝福しているが、竹富島でも神司などの神人がアンガマとともに各戸訪問をしている。子供たちの歌ったというタントゥイの歌の歌詞は不詳であるが、山原の事例と竹富島の事例が酷似していることに驚きを覚える。このような基層文化の根強いあり方によって、分からなかった部分が明らかになっていくと考えられる。